

1. 3年間の科研活動を振り返る

2004年2月15日

門倉正美

2002年度から留学生入試として日本留学試験が導入され、日本語のテストも、それまでの日本語能力試験1級の問題内容とは様変わりした。日本留学試験導入を軌道づけた報告書では、日本留学試験の日本語科目は日本語能力試験のように日本語能力一般を測るのではなく、「アカデミック・ジャパニーズ」能力を測るとされた。

報告書は「アカデミック・ジャパニーズ」を「大学での学習・生活に必要な日本語力」と定義したが、その具体的な内容やシラバスは提示しなかった。そこで、大学での日本語教育や、日本語学校等での日本語予備教育に携わる日本語教育者のあいだで「アカデミック・ジャパニーズ」の内実と教え方の模索が開始されることになった。

考えてみれば、大学で日本語を教えている者としては当然、「大学での学習（生活の方までは考えていなかったと思うが）に必要な日本語力」をつけるよう教育してきたわけなのだが、いざそれが「アカデミック・ジャパニーズ」という目新しいコンセプトで全体像を問い返されてみると、日本語教育界では、そうした教育研究領域がほとんど未開拓のままであったことに気づく。

本科研は、そうした問題意識のもとに大学および大学院での日本語教育担当者10名と、日本語学校での日本語教育担当者1名との共同研究としてスタートした。研究題目は、「日本留学試験が日本語教育に及ぼした影響に関する調査・研究——国内外の大学入学前日本語予備教育と大学日本語教育の連携のもとに」である。予定していた3年間の研究期間が終わりに近づいている今、当初の狙いがどの程度達成されたかを整理しておきたい。

本科研への補助金を申請するにあたっては、次の3点を研究目標に掲げていた。

- 1) 「日本留学試験」の「日本語」の例題や出題された問題を分析・検討し、よりよい例題を豊富に対置することによって「日本留学試験」の問題の質の改善に貢献する。
- 2) 「アカデミック・ジャパニーズ」の実質的なシラバス（教育内容体系）を作成し、それにとった教育方法や教材例を開発する。
- 3) 国内外の大学入学前日本語予備教育機関と大学での日本語教育機関との連携のもとに、学習者の日本語能力習得の追跡調査を行うとともに、それぞれの教育内容についての情報・意見交換を緊密に行っていくことによって、「アカデミック・ジャパニーズ」教育への共通理解のもとでの日本語教育の一貫性を形成し、教育効果の向上に貢献する。

1. 日本留学試験「日本語」科目試験問題の分析と対案の提示

本科研期間以前及び期間中の科研メンバーによる本科研テーマに関する研究はすべて、

2003年10月に刊行した中間報告書『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ』（目次を本報告書「資料」編の最後に再録した）と、本報告書に収録されている。

これらの中で、日本留学試験「日本語」科目分析については、門倉「日本留学試験の狙いと問題点」、門倉「日本留学試験の問題点(2)」、佐々木他「日本留学試験の「日本語」を考える」、堀井「日本留学試験とその「日本語」試験」（以上、中間報告書所収）、堀井「日本留学試験の「日本語」シラバスを再考する」、門倉「読解＝大意把握でよいか?」、村上「作文評価における文の種類の影響」、村上「日本留学試験「記述問題」が測っているもの」、村上他「日本留学試験「記述問題」における採点基準の見直し」、因「「日本留学試験・聴読解」の分析」（以上、本報告書所収）などによってすすめられてきている。

試験問題改善のための対案の提起という点では、本科研メンバーが中心的な役割を果たした、佐々木瑞枝監修の『日本留学試験実戦問題集 読解』、『同 聴読解』（ジャパンタイムズ刊）をあげることができる。現行の試験の枠組みでは、「アカデミック・ジャパニーズ」基本力の測定という点で、狙いとしたい要素を作題に組み込むことに十分に成功しているとは言い難いが、問題提起としての意味はもっていると思われる。

2. 「アカデミック・ジャパニーズ」のシラバスと教授法の開発

中間報告書と本報告書の多くの論文が、「アカデミック・ジャパニーズとは何か」という根本的な問いから出発していることが見てとれる。2002年度、2003年度と年に3回開いた科研メンバー全体研究会では、メンバーのそれぞれが各種の教育現場で「アカデミック・ジャパニーズ」のあり方を模索しつつ試行しており、そこでの実践研究の所見やコメントをぶつけあうことがしばしばあった。

こうしたプロセスの中で、アカデミック・ジャパニーズをめぐる議論を、同じ問題につきあっている、より多くの日本語教育者たちと共有することが必要だということになった。そこで、中間報告書の刊行を契機として、報告書に関心をもつ人たちに働きかけ、2004年1月に「アカデミック・ジャパニーズ・グループ」という名称のテーマ研究会（日本語教育学会傘下の研究会）を発足させた（アカデミック・ジャパニーズ・グループ規約を本報告書「資料編」に収録した）。

2004年度には、科研メンバーによる固有の研究会活動に加えて、アカデミック・ジャパニーズ・グループとしての公開研究会を5回開催した。第1回は、アカデミック・ジャパニーズの結成大会として位置づけ、科研メンバーがそれぞれのテーマについて発表した。第2回以降は、アカデミック・ジャパニーズの教育研究の内実をともに考えていくためには、日本語教育と接点のある異領域の研究から学ぶところが多いと考え、日本語教育研究者ではない3人の研究者からきわめて刺激的な提言をうけ、実りある議論をかわすことができた。第5回のMarriott氏については、まだ予稿原稿をメンバーに配布している段階だが、Academic Englishの研究の蓄積からは学ぶことが多いだけに、生産的な会合となることを期待している。以下に5回の研究会の概要を記す。

- 1) 2004年5月23日・東海大学（日本語教育学会春期大会開催とあわせて）
日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ——科研メンバーによる問題提起
- 2) 2004年7月10日・武蔵野大学
日本人学生への日本語力テストについて 小野博（メディア開発教育センター）
- 3) 2004年9月18日・東京海洋大学
日本人学生への教養教育としての「言語表現」 筒井洋一（京都精華大学）
- 4) 2004年12月11日・武蔵野大学
母語教育の日米比較と大学での日本語教育——国語科教育の視点から
井上尚美（創価大学）
- 5) 2005年3月5日・東京大学
Developing Research in English Academic Interaction

Helen Marriott (Monash University)

こうした科研メンバー相互の研鑽や、隣接領域との対話的接触に表れているように、アカデミック・ジャパニーズをめぐる議論はまだ発展途上のものであり、当初予定していたような「シラバスと教授法の開発」にまでは至っていない。しかし、アカデミック・ジャパニーズ・グループの設立が表しているように、「アカデミック・ジャパニーズ」という教育研究領域は、より広範な議論と探求のもとにすすめられるべきものであり、また、それに値する教育研究の沃野であるとの手応えを感じている。

3. 国内外の大学入学前日本語予備教育機関と大学での日本語教育機関との連携

科研の性格上、日本語学校の教育者が分担者として共同研究に加われないという制約を強く感じさせられた。嶋田和子氏に研究協力者として参加してもらい、日本語教育振興協会の研究活動の蓄積について情報提供してもらっているが、大学の日本語教育者と日本語学校の日本語教育者との連携はまだ不十分と言わざるを得ない状況である。

しかし、その一方で、本科研メンバーの構成が表しているように、大学および大学院における日本語教育者の連携という点では、多種多様な教育現場に携わる者たちの共同研究がすすめられてきたという点は本科研の一つの大きな成果であると言えよう。

また、海外の日本語教育機関との連携という点では、本科研メンバーは韓国、中国、香港、オーストラリア、アメリカ、カナダ、スペイン等で本科研テーマに関する研究発表ないしは共同研究を推進してきている。曹大峰・北京外国語大学教授、鄭起永・釜山外国語大学助教授と門倉、堀井による2004年8月の日本語教育国際研究大会における「アカデミック・ジャパニーズ」ワークショップの共同コーディネーションや、Helen Marriott・モナシュ大学教授のセミナーにおける門倉の講演、Marriott教授による第5回アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会講演は、こうした海外研究者との共同研究の成果の現れである。ただ、海外の日本語教育者との連携も大学の研究者との連携が主であり、予備教育担当者との連携はまだ糸口がつかめないでいる。

4. 積極的な発信

日本留学試験の試験問題の分析とアカデミック・ジャパニーズの探求は、いずれもきわめて若い教育研究領域であるだけに、本科研メンバーたちは、問題の所在と探求の方向性をアピールするため、積極的に発信することを心がけてきた。そうした姿勢を表す活動の主なものとして、次のようなものをあげることができよう。

- 2002年10月・高知大学
2002年度日本語教育学会秋期大会パネルセッション
佐々木瑞枝、門倉正美、堀井恵子、嶋田和子、山本富美子：日本留学試験の「日本語」を考える（科研中間報告書所収）
- 2002年11月・中国天津外国語大学
東アジア日本語教育シンポジウム研究発表
堀井恵子、門倉正美：アカデミック・ジャパニーズとは何か——どのようにその力をつけていけるか（科研中間報告書所収）
- 2003年7月・韓国中央大学
韓国日本学会連合会研究発表
門倉正美：日本語能力試験から「日本留学試験」へ——試験問題改良と「アカデミック・ジャパニーズ」を考えるために
- 2003年10月・横浜国立大学留学生センター
門倉正美編著『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ』
科学研究費補助金(A)(1)課題番号14208022 中間報告書刊行
- 2003年10月・大阪大学
第18回国立大学日本語教育研究協議分科会
村上京子、因京子、門倉正美：日本留学試験「日本語」問題を読む
- 2004年1月・日本語教育学会 テーマ研究会
アカデミック・ジャパニーズ・グループ 設立
- 2004年5月・東海大学
日本語教育学会春季大会パネルセッション
二通信子、大島弥生、山本富美子、佐藤勢紀子、因京子：アカデミック・ライティング教育の課題
- 2004年5月
佐々木瑞枝監修『日本留学試験実戦問題集 読解』ジャパントイムズ刊
- 2004年8月・昭和女子大学
日本語教育国際研究大会ワークショップ
門倉正美、堀井恵子、曹大峰、鄭起永：アカデミック・ジャパニーズ

- 2004年10月
佐々木瑞枝監修『日本留学試験実戦問題集 聴読解』ジャパンタイムズ刊
- 2004年10月・新潟大学
日本語教育学会秋季大会パネルセッション
三宅和子、堀口純子、三原祥子、筒井洋一：大学での「日本語」教育の意味と可能性

以上、本科研の3年間の活動を振り返る中で、「アカデミック・ジャパニーズ」というテーマが、この課題に携わる者たちにとって多くの可能性をもった豊かな教育研究領域を指し示していることを確認し得たと思う。「アカデミック・ジャパニーズ」に関心をもつ国内外の日本語教育研究者が、この未開拓の領域にそれぞれの問題意識と識見・経験をもって参画することを呼びかけたい。